鉄砲洲神社　素読論語　解説
（平成 23 年 11 月 18 日）

子罕　第九

10　顔淵 喟然として歎じて曰く、之を仰げば 弥 高く、之を鑽れば 弥 堅し。之を瞻れば前に在り。忽焉として後に在り。夫子循循然として善く人を誘く。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷めんと欲すれども能わず。既に吾が才を竭くせり。立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従わんと欲すと雖も、由末きのみと。

顔淵がため息をつきながら愚痴ったと云う所でしょうか。お師匠さんはどうにも偉大すぎて近寄れないというため息です。

先生を仰ぎみれば、高い峰のように聳えているし、鋼を切るようにしても堅くてどうにも切る事は出来ない。先生が前にいると思っていたら、前にいる先生が突如後ろにいる。先生は順序立てて良く人を導くし、視野を広げるのに書物を用いて広くするよう努力をされるし、礼を実習しながら色々な知識を整理させてくださった。後を追いかけようと思って努力はしているのだが、なかなか追いつくことが出来ない。自分自身の才能・力は出しきってしまって、がっかりしているが、先生の素晴らしいところは高く聳え立っている所だし、ついていきたいと強く願っているけれども、全く方法が分からない。

こういうお師匠さんがいたら凄いなと思いますし、このように熱望する人も凄いものだなと思います。

11　子の疾 病なり。子路 門人をして臣為らしむ。病 間にして曰く、久しきかな、由の詐を行うこと。臣無くして臣有りと為す。吾 誰をか欺かん。天を欺かんや。且つ予 其の臣の手に死なん与りは、無寧 二三四の手に死なんか。且つ予 縦い 大葬を得ずとも、予 道路に死なんやと。

孔子の病気が重くなりました。孔子が病気になって子路が、先生が死ぬのであれば、少し格好を付けて立派なお葬式をしたいと思い、門人を家臣のように装いました。病気は重かったけれども、若干回復した時に孔子がこの事を知って、「昔から子路は嘘をつくことが度々あったけれども、変わらないね。私に家臣はいないというのは誰でも知っているのに、子路は偽りをして一体誰を欺こうとしているのか。子路が欺くというより、孔子が誰かを欺こうとしているようにみえてしまうではないか。私は天を欺むこうしているのかね。とんでもない事だ。私は偽りの家臣の手で葬式を出して貰うよりは、門人達の手によって葬式を出して貰う方が良い。また、例え立派なお葬式をして貰わなくても、道端でのたれ死にする事はないだろう」と言われました。

12　子貢曰く、斯に美玉有り。匱に韞めて諸を藏せんか。善賈を求めて諸を沽らんかと。
　　子曰く、之を沽らんかな。之を沽らんかな。我は賈を待つ者なりと。

子貢が何で先生は士官をしないのかを玉に例えて孔子に質問している所です。

子貢は、「美しい玉を箱に収めてしまいっぱなしでは、どうにもならないのではないのですか。しかるべき値段をつけて御自分で売りませんか」と質問をしました。孔子は「売りたいね、売りたくてしょうがないのだけれども、誰も買い手が付かない。私にしかるべき値段をつけ、認めて買いに来てくれる者を待っているのだ」

買い手は誰かいないのかと買主を求めて放浪の旅を長く続けていましたが、結局売る事が出来ず、故郷に帰ってお弟子さん達に教育を施すことによって、後世に孔子の名を残したのですから、どこかの国の内閣総理大臣になって孔子の名前が消えるよりは、三千人の弟子に教育を施したと云う実績は素晴らしい事です。

ただ学者が言う「弟子三千人」という記録を見ると、実数の三千人と、口先で大勢いたと云う三千人と云うのが、ごちゃ混ぜになっていまして、弟子は皆三千人と書いてあるのです。お弟子さん達の本当の人数は良く分かりません。

当時の遊説は自分のピーアールですので、自分の才能や力を売って歩くと云うのに直結するようです。今はテレビやマスコミで広がりますが、当時は自分で遊説して歩くことによって名が広まってゆくと云うのが大きな手段だったようです。ただ墨家（墨子）は戦争で自分の力を発揮して名を売ったという例があります。